# 博士と狂人

THE PROFESSOR AND THE MADMAN

世界最高の辞書OEDの誕生秘話

サイモン・ウィンチェスター

鈴木主税＝訳

早川書房

# 博士と狂人

THE PROFESSOR AND THE MADMAN

世界最高の辞書OEDの誕生秘話

江苏工业学院图书馆
藏书章

サイモン・ウィンチェスター
鈴木主税＝訳

早川書房

博士と狂人
世界最高の辞書OEDの誕生秘話

1999年4月20日　初版印刷
1999年4月30日　初版発行

*

著　者　サイモン・ウィンチェスター
訳　者　鈴木主税
発行者　早川　浩

*

印刷所　精文堂印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社

*

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2－2
電話　03-3252-3111(大代表)
振替　00160-3-47799
定価はカバーに表示してあります
ISBN4-15-208220-8 C0082
Printed and bound in Japan
乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

〈検印廃止〉

¥1800

# 博士と狂人

## 世界最高の辞書ＯＥＤの誕生秘話

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房
© 1999 Hayakawa Publishing, Inc.

# THE PROFESSOR AND THE MADMAN

*A Tale of Murder, Insanity, and the Making of the Oxford English Dictionary*

by

Simon Winchester

Copyright © 1998 by
Simon Winchester

Translated by
Chikara Suzuki

First published 1999 in Japan by
Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by
direct arrangement with
Agnes Krup Literary Agency
acting on behalf and in conjunction with
Sterling Lord Literistic, Inc.

---

装幀　渋川育由
写真提供　オックスフォード大学出版局

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# G・Mを偲んで

# 目次

はじめに　7
1　深夜のランベス・マーシュ　13
2　牛にラテン語を教えた男　35
3　戦争という狂気　57
4　大地の娘たちを集める　91
5　大辞典の計画　119
6　第二独房棟の学者　135
7　単語リストに着手する　153
8　さまざまな言葉をめぐって　169

9　知性の出会い　189
10　このうえなく残酷な切り傷　217
11　そして不朽の名作だけが残った　235
あとがき　253
著者の覚書　259
謝辞　265
参考文献　273
訳者あとがき　277

# 註　記

各章の冒頭には *The Oxford English Dictionary*（『オックスフォード英語大辞典』）から採録したものが訳出して掲げてある。以下にその記号の読み方を記しておく。

1……1100年以前
2……12世紀（1100 - 1200）
3……13世紀（1200 - 1300）
4……14世紀（1300 - 1500）など
4 - 6……14世紀 - 16世紀（1300 - 1600）
*dial.*……方言
*Hist.*……歴史的
*arch.*……古風
Cf.,cf.……（比較）参照
a.……諸外国語から派生したことを示す
f.……語形、語源（語尾変化させて、構成・派生したもとの語）を表わす
＊……左肩に＊のつく語は、初出例を示す
‖……充分に英語化していないことを示す

（編集部）

# はじめに

**Mysterious** (mistíə·riəs), 形容詞. [f. ラテン語 *mystērium* MYSTERY[1] + OUS. Cf. フランス語 *mystérieux*.]

**1** 神秘に満ちた；神秘につつまれた；人間の知識や理解力ではわからない；説明や解明や理解が不可能か困難な；原因や性質や目的がはっきりしない.

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

近代の文献史に詳しい人びとのあいだではよく知られていることだが、一八九六年の晩秋の霧のたちこめた寒い午後、バークシャーのクローソンという小さな村で、ある重要な対談が行なわれた。

対談の一方の当事者は、ジェームズ・マレー博士。当時『オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリ』（『オックスフォード英語大辞典』、略称ＯＥＤ）の編纂主幹をつとめていた偉大な人物である。この日、オックスフォードから五〇マイル離れた村を博士が汽車で訪れたのは、Ｗ・Ｃ・マイナーという名の謎の人物に会うためだった。マイナーはＯＥＤの作成に最大の貢献をした一人で、他の多くの篤志協力者とともに、この辞典の作成に中心的な役割をはたしていた。

これに先立つ二〇年近くのあいだ、マレーとマイナーは定期的に手紙のやりとりをし、英語辞典の編纂にかんする細かい問題について意見を交換していた。だが二人は一度も会ったことはなかった。マイナー博士はクローソンの自宅から出かけたくないか、あるいは出かけられない立場らしく、オックスフォードを訪れるつもりはないようだった。彼は事情をいっさい説明せず、ただ丁重に招待を断わるだけだった。

マレー博士のほうもなかなか仕事から離れられず、「写字室」という名で知られるオックスフォー

ド大学の辞典編纂室にほとんどこもりきりだった。だが、マレーはこの謎につつまれた協力者に心を引かれ、ぜひ会って謝意を伝えたいと心から願いつづけていた。そして一八九〇年代末には、なんとしても会おうという気持ちになった。辞典が半ば完成に近づいたそのころ、編纂に貢献したすべての人が、正式な形で功績をたたえられていたのだ。マレーは辞典の作成にかかわった全員に——人前に出たくないらしいマイナー博士のような人たちにも——貴重な貢献への感謝の念を、どうしても伝えたかった。彼は自分から訪ねていくことにした。

訪問を決意するとすぐ、マレーは電報でその意向を伝え、汽車でクローソン駅まで行くつもりだとつけ加えた。当時クローソン駅はウェリントン校駅と呼ばれており、この村にある有名な男子校の通学に使われていた。マレーはそこに、一一月のある水曜日の二時過ぎに着くと知らせた。マイナー博士は返事の電報で、会うのを楽しみにしている、心から歓迎すると伝えてきた。オックスフォードからの旅は天候に恵まれ、汽車の遅れもなかった。要するに、幸先のいいスタートだった。

クローソン駅では、磨きあげた四輪客馬車と制服を着た御者が迎えにきており、ジェームズ・マレーが乗りこむと、馬車はひづめの音を響かせながら田園風景の広がるパークシャーの小道を引き返した。二〇分ほどして私道に曲がると、背の高いポプラ並木がつづき、やがてたどり着いた大きな屋敷は、いささか不気味な雰囲気の漂う赤煉瓦づくりの建物だった。いかめしい召使に案内されて二階にあがり、書棚に囲まれた執務室に入ると、どっしりとしたマホガニー材の机のうしろに、いかにも重要人物らしい男が立っていた。マレー博士は改まって一礼し、何度も練習を重ねた短い挨拶の言葉を口にしはじめた。

「はじめまして。ロンドン言語協会のジェームズ・マレーと申します。『オックスフォード英語大辞

典』の編纂主幹をつとめている者です。ようやくお目にかかれまして、まことに光栄に存じます。かねがねご協力いただいているW・C・マイナー博士でいらっしゃいますね？」

相手はすぐには答えず、二人のあいだに一瞬気まずい空気が流れた。時計の音が妙に大きく聞こえる。廊下をそっと歩く足音。遠くでいくつもの鍵が触れ合う音。そのとき、机のうしろの男が咳払いをして、こう言った。

「まことに残念ですが、それは違います。誤解なさっているようです。私はブロードムア刑事犯精神病院の院長をつとめる者です。マイナー博士は間違いなくここにおりますが、彼は入院患者であります。二〇年以上前からここに入院している、最も古い患者なのです」

この件にかんする公式文書は秘密扱いで、一世紀以上のあいだ公開されなかった。しかし最近、私は許可を得てそれに目を通した。以下に述べるのは、その文書から明らかになった稀有の悲劇であり、胸に迫る感動の物語である。

# 1

# 深夜のランベス・マーシュ

**Murder** (mɐ̞ˑɪdəɹ), 名詞. 語形 : a. 1 morþor, -ur, 3-4 morþre, 3-4, 6 murthre, 4 myrþer, 4-6 murthir, morther, 5 *Sc.* murthour, murthyr, 5-6 murthur, 6 mwrther, *Sc.* morthour, 4-9 (now *dial.* and *Hist.* or *arch.*) murther; *β*. 3-5 murdre, 4-5 moerdre, 4-6 mordre, 5 moordre, 6 murdur, mourdre, 6-murder.

「古英語 *morðor* 中性（男性名詞の複数形 *morþras*）＝ゴート語 *maurþr* 中性 : 古期チュートン語 **murþro*m : 前チュートン語 **mrtro-m*, f. 語根 **mer-*: *mor-*: *mr-* 死ぬ, ラテン語 *morī* 死ぬ, *mors* (*morti-*) 死, ギリシア語 *μορτός*, *βροτός* 死すべき運命の, サンスクリット語 *mṛ* 死ぬ, 男性形 *marā*, 女性形 *mṛti*, 死, *mārta* 死すべき運命の, 古期スラブ語 *mīrěti*, リトアニア語 *mirti* 死ぬ, ウェールズ語 *marw*, アイルランド語 *marþ* 死んだ.

この語は英語とゴート語以外のチュートン語には見られないが, 大陸西ゲルマン語には存在したことは明らかである. それは, この語が古期フランス語 *murdre*, *murtre*（近代フランス語 *meurtre*）および中世ラテン語 *mordrum*, *murdrum* の語源であり, また古期高地ドイツ語には派生語の *murdren* 謀殺があるからだ. ゴート語以外のすべてのチュートン語に同義語があり, 語根が同じで接尾辞が異なっている : 古英語 *morð* 中性, 男性 (MURTH[1]), 古期サクソン語 *mord* 中性, 古期フリジア語 *morth*, *mord* 中性, 中期オランダ語 *mort*, *mord* 中性（オランダ語 *moord*), 古期高地ドイツ語 *mord*（中世高地ドイツ語 *mort*, 近代ドイツ語 *mord*), 古期ノルド語 *morð* 中性 : 古期チュートン語 **murþo-*:前チュートン語 **mrto-*.

（成節の *r* の前では *d* が *ð* に変化するのが一般的な傾向であるのに反し）もとの *ð* が *d* に変化したのは, おそらくアングロフランス語の *murdre*, *moerdre* と法律用ラテン語 *murdrum* の影響によると思われる]

1　最も凶悪な殺人罪 ; またその事件. イングランド（スコットランドとアメリカも）の法では, 予謀の犯意をもって人間を不法に殺すことと定義されている ; しばしばもっと明確に, 故意の謀殺という.

古英語では, この語は強く非難されるどんな殺人にたいしても用いられた（またこの語には「非常な悪事」, 「致命傷」, 「苦痛」という意味もあった). しかしより厳密には, 密かに行なわれる謀殺を意味した. 古代ゲルマン語では, 密かに行なわれる謀殺だけが（現代の意味で）犯罪とみなされ, 公然と行なわれる殺人は, 流血にたいする流血の復讐または埋め合わせを, 個人が間違って呼んだ呼び方と考えられていた. エドワード 1 世の時代でさえ, 13世紀末に書かれた英法の概説書『ブリトン』によれば, アングロフランス語の *murdre* はそれを犯した者と被害者の双方が特定できない場合の殺人罪だけを意味するとされている. 謀殺の法律上の定義に入っている「予謀の犯意」については, (現在の解釈のように）かいつまんで定義することはできない. 被害者の死を意図しなくても「故意の謀殺」で有罪とされることがある. たとえば他者の死を招くことになりそうだと知りながら不法な行為をし, それによって人が死亡した場合, またはなんらかの犯罪を犯すために負わせた傷から死亡した場合である.「謀殺」に不可欠な条件は, それを犯した者の精神が健全であること, また（スコットランドは異なるが, イングランドでは）死亡の原因となる不法行為がなされたあと, 一年と一日以内の死亡であることだ. イギリスの法においては, 謀殺の罪に段階は認められていないが, アメリカの法は「第一級謀殺」（刑の軽減理由がない場合）と「第二級謀殺」を区別している.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com